

文化・芸術

「育夫像」

1945年、油彩、カンバス
90・4号×64・5号

清水登之（1887～1945年）

海軍の夏服に身を包んだりのしい青年は、本作を描いた画家清水登之（しみず・とし）の長男、育夫です。現在の栃木県栃木市に生まれた清水は、20歳の時に単身で渡米し、米国やフランスの美術界で活躍しました。帰国後は二科会で受賞を重ね、独立美術協会の設立に参加し、従軍画家として戦地にも赴きました。

清水は育夫を幼いころから作品中にしばしば登場させましたが、本作は第2次世界大戦の終戦の年、海軍兵であった育夫の戦死の知らせを受けて制作された肖像です。育夫の肖像は本作を含め現在4点が確認されており、そのすべてが大川美術館に収蔵されています。

特に、肩から上の部分が丹念な筆致で描かれた本作は、ありし日をしのぶための遺影のようであり、胸の張り裂けそうな思いをどうすることもできず、愛する息子を思つて筆を走らせるしかなかった清水の耐えがたい悲しみが伝わってくるようです。（佐藤）

※同時開催…企画展「もこもこどもと大川びじゅつかん」

《名画の扉》

大川美術館コレクション展
「特集展示：戦後80年松本竣介と
同時代の画家たち」から

